NTS物語

❸ ビジネスモデルの確立へ向けて（第41回）

4　20年目からの挑戦

2. 将来ビジョン(1) これから10年（上）

代表取締役　吉田　隆

5年間にわたり、編集企画体制、営業体制、システム開発体制、科学技術情報部の誕生と成長の跡を辿ってきた。理工系専門出版社NTSの特徴は、一般書店では販売が困難な先端R&D領域の高額専門図書を、電話による試読システムと、本一冊ごとに管理するバーコードシステムとを組み合わせ、出版社と数十万の研究者・技術者を直接結ぶ仕組みを構築したことにある。

この先、過去20年に蓄積した経営資源を元に、私たちは何を求め何処に進路を定めるべきか?特にこれから10年、どのような商品を開発し、どのような販売手法で社会に夢と希望を送り続けることができるだろうか?本稿の締め括りに当り、NTSの将来ビジョンについて語りたい。

●20年ひとまとめ

ここで、設立からの20年を総括しておきたい。昭和60年、DMによるセミナー事業からスタートした。そもそも出版業ではなく情報業からの旅立ちだった。昭和62年、大型書籍の自主発刊体制に着手し編集企画体制が生まれ、同時に販売手法をDMから電話による試読システムに転換し営業体制が誕生した。平成5年、セミナー'講演録'の成功により、3万円、300ページの書籍でも試読システムが成り立つことが分かった。それまで、定価5万円、1000ページでなければ試読は成りたないという固定観念があった。試読対象は本だけではないと考え始めたのもこの頃である。平成3年、「表面科学の基礎と応用」発刊を契機にコンピュータによる顧客管理システムを導入し、平成9年、「現代おさかな事典」発刊を待ちバーコードシステムが稼動を始め、全書籍が背番号を持ち、出版社と顧客を直接結ぶ流通体制が整った。平成7年、試読システムへのDM同封により抄録者を募集する新機軸が功を奏し、科学技術情報部が誕生した。高度専門知識を持つ約300名の専門家の存在は、NTSの未来の力の源泉でもある。平成13年、念願の月刊誌「未来材料」を刊行した。本誌は、理工系専門出版社としての知名度の向上に大きく寄与している。平成16年、「骨単」シリーズの大ヒットにより、過去3年ほど進めてきた、取次・書店ルートの開拓に大きな弾みが着いた。平成16年、科学コミュニケーション推進室を設立し、これまでの専門家による専門家のための出版・情報事業に加え、身の回りの科学や未来社会への理解を一般社会へ向けて啓蒙する事業への取り組みを始めた。こうした活動の結果、三つの事業基盤が整った。

●三つの事業基盤

（第1の事業基盤）

専門家向けの出版・情報事業

ハンドブック等の大型書籍による知識の普遍化・大系化事業、講演録・資料集による先端情報の速報事業、「月刊未来材料」による定期的な情報提供、科学技術情報部による情報のDB化事業などで構成され、大系化、速報性、定期性、DB等の情報が同心円上で展開する構図である。

（第2の事業基盤）

電話とバーコードによる試読システム

第1の事業基盤を支える試読システムは、本来、宅急便で自社本を送るための手段だった。しかし、近年、自社本だけでなく他社本の相乗せや、他社商品案内の同封サービスも行うようになった。つまり、手段という脇役から事業の主役に躍り出る機会を伺っている状況である。将来、ウェブと有機的に組み合わせ、リアルとネットが融合した特定個人を対象とする直販市場の開拓が視野にある。

（第3の事業基盤）

一般向けの出版・情報事業

取次―書店、外商、DM、イベント等の電話営業以外の販売ルートなどを通じて、科学に関心を持つ一般読者を開拓する。商品開発は芸術と科学の融合を全面に押出す前例のない未知の領域であるため、暫らくは試行錯誤の連続だが、様々なチャネルを開きつつ、あせらず一歩一歩、新たなフロンティアの開拓を進めたい。

●'ゴールデンコンセプト'を求めて

第3の事業は商品開発もさることながら、出来た商品を確実に読者に届ける仕組みの構築が求められる。それは本を売ることを書店だけに頼ることではない。それでは本が売れにくいという書店と同じ悩みを抱え続けることになり、加えて誰が本を買ったのかが見えにくい。近未来の商品流通は、匿名性ではなく実名性が鍵を握るだろう。その意味では、書店、外商、DM、ウェブ、展示会等、バラバラに存在する様々なモデルを再構築し統括する手法、100%の開封率を誇り、読者の名が確実にわかる'試読システム'に相当する完成された仕組みを創造する必要がある。その仕組みを'ゴールデンコンセプト'と呼ぶことが許されるならば、その'コンセプト'こそ今後10年のNTSの大きなチャレンジアイテムの一つとなるはずである。次回は、3つの事業基盤の其々の方向性について考える。

◉編集後記

サラブレットはより速く走るために、人間が様々な遺伝子の配合を駆使して作り上げた、走る芸術品である。その足首は細く、馬体はしなやかで宙を舞う。走ることが宿命ゆえに、故障が安楽死の処置を招くことも多々ある。いろいろな動物達はこの地球上に生命を受け、やがて死を迎える。私達人間も然り。「僕は治療の出来ない獣医です」本来なら生命を助けるべき職業ながら、家畜という運命のために治療よりも経済性が優先される先生の研究。時としてそのつらさが、はにかんだ笑顔になって出ていた気がする。何一つ粗末にしてはいけないと、心から思った。（あしだ）

◉編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

〒113-8755　東京都文京区湯島2-16-16　㈱エヌ・ティー・エス「NTSニュース」係
FAX : 03-3814-9152　E-mail : k-kunimoto@nts-book.co.jp

NTSニュース

2005年6月号（通巻76号）
2005年6月3日発行